# 『総説 現代社会政策』

成瀬 龍夫
（経済学部教授）

二〇〇二年九月に著書『総説 現代社会政策』を、東京にある社会科学専門書の出版社である桜井書店から出した。このたびの出版については、少なからず私の思い入れがある。

経済学部の政策系列の伝統的な講座科目は、経済政策と社会政策である。滋賀大学経済学部に両講座が設けられたのは昭和四十年代のことであるが、社会政策原論の講義を初代に担当されたのは、故河野稔教授で、その後を美崎皓教授が引き継いでいた。美崎教授がご病気で亡くなられた後、平成七年度から私が担当している。

自分が授業を担当する段になって感じたのは、社会政策のテキストに関する悩みである。既存の教科書には内容的に古い事項に力点を置きすぎたもの、教科書としての総合性や体系性に弱いもの、国際的動向への説明が少ないもの、社会政策の近年の動向とそれに関する研究の状況が取り上げられていないことなど、さまざまな不満があった。そのため、いずれは自らきちんとした教科書を用意する必要があると考えていた。しかし、一人で取り組むにはそれなりの逡巡もあった。しかし、意を決してこのたびそれを一定のかたちで実現することができた。

本書の章別構成は、第一章社会政策の原理、第二章社会政策の公準、第三章社会政策の歴史、第四章労働時間と社会政策、第五章賃金と社会政策、第六章労働市場と社会政策、第七章社会保障の原理と制度、第八章少子・高齢社会と社会政策、第九章福祉国家と福祉社会、第十章二十一世紀の社会政策、となっている。

内容の面では、①社会政策に関する定義を市場原理との関係で試みたこと②社会権、国際労働基準、ナショナル・ミニマムなど五つの政策公準を提示したこと③社会政策の動向をめぐる重要なトピックスを取り上げたこと④社会政策に関する二十世紀の到達点と二十一世紀の課題を展望したこと、など筆者なりに特色を挙げることができるが、結果的には学生用教科書としては難度が高く、社会政策に関する専門的研究の入門書のようなレベルのものとなった。

二〇〇二年十月の秋セメスターの授業で早速教科書として使い始めたが、学生諸君には講義内容の全体をまず把握してもらうことができるようになり、講義の質を大きく改善できたと思っている。

本書の執筆時期は、経済学部長二年目の二〇〇一年七月から二〇〇二年五月までの十ヶ月で、私としては初めての書下ろしである。一年目にも十ヶ月ほどをかけて『国民負担のはなし』（自治体研究社）を出版した。出版後に、同僚たちから「公務多忙であったのによく原稿が書ける時間があったね」と聞かれるが、出張などがなかった土日は自宅で終日ワープロを叩いていた。むしろ、公務専念の時期であったからこそ書けたという逆説を実感した次第である。